



## 書評

価格はすべて10%税込です

## 思春期

塚本千秋 文  
尾上太一 写真

金剛出版, A5判78頁, 2,970円, 2024年3月刊

(あなはクリニック) 滝川一廣

本書は5年前に出された『相談者』（日本評論社, 2018）の続編で、前編同様、塚本千秋さんの文と尾上太一さんのモノクロ写真のコラボからなっている。尾上さんの撮りためた写真を眺めて塚本さんのところに浮かんだ物語を尾上さんに書き送り、そこから尾上さんが新たな写真を撮って、その写真からまた千秋さんが物語を彫琢するという往復作業から生まれた作品である。

住宅街の古びた一軒家で猫を受付係にした相談室を訪れる相談者10人、という構成も前編のまま。ただ、今回はいずれも思春期ただなかの子どももしくはその家族が相談者で、それが本書のタイトルとなっている。前編でも一人、思春期の相談者が描かれたけれど、本編はそれを大きくふくらませている。

訪れる者を、患者やクライアントではなく、「相談者」と呼ぶ、この相談室は次のような場所である（前編から引用）。

なんでも相談できます。  
人に言えない悩みはもちろん、  
約束を度忘れた時のいいわけ、  
居眠りしたいのにできない会議の過ごし方、  
舌打ち癖のある友人にそれとなく指摘する方  
法の相談にも乗ります。

でも、  
正しように聞こえる説得の仕方や  
他人の欠点についての相談は苦手です。

相談をするかしないかも相談できます。  
迷ったら、黙って過ごしてもかまいません。

さて、書評の依頼とともにこの本が届いたのは、偶然ながら、ある臨床グループから「思春期」を語ることを頼まれ、そのレクチャーとケースカンファレンスの二日前だった。読み終えてでかけ、会ではまず本書を紹介して（写真も見てもらうために回覧）、それを枕に思春期の話に入った。ここには思春期のエッセンスが描かれている、と。枕そのままではないけれども、ここに再構成して書評としたい。

※

思春期といえば、こころをよぎる一首がある。

挨拶をしなくなりたる少女いて  
成長とはかく黙すものなり

嶋田武夫

児童期には屈託なくおしゃべりし、はきはき挨拶していた子どもたち。けっこうおしゃまだったり一人前の口を利いたりしていた子どもたちが、思春期に入るとおとなを前に蛹のように黙すようになる。挨拶も交わさず、おとなの脇をすり抜けていく。それが「成長」なのである。

子どもは児童期の終わりにはすでに「おとなのスタイル」を獲得している。挨拶ができる、とはそういうことである。昔の子どもたちは、そこからそのままおとなになっていった。児童期を過ぎれば、もう成人期だった。しかし、現代ではそうはいかず、さらに思春期という時期を潜らねばならない。「スタイルとしてのおとな」の内側に「個としての自分」を醸成せねばならず、思春期の内奥は、羽化を待つ蛹の内部さながら、混沌としている。その混沌は言葉にならないし、まして外に挨拶なんてしてられない。

本書には、まさにその思春期の相談場面を切り取ったスナップショットが8葉、いくつかの間奏をはさみながら、散文詩のように描かれている（残り2葉は家族のもの）。前作『相談者』と比べれば明らかだが、『思春期』の相談者たちは言葉が寡（すく）ない。「黙って過ごしてもかまいません」に応えるように何も語らず帰る子もいる。これで相談になって

いるのか、相談者の力になれているのかと、ふと不安になって自問することもある（間奏「母猫」）。いや、これでよい。「成長とはかく黙すもの」だからである。そこへの深い首肯の眼差しが、本編のエッセンスとなっている。一葉一葉のスナップショットから、相談者たちがそれぞれに思春期を生きる姿が浮かんでくる。語りが僅かなぶん、さまざまな連想やイメージが湧くけれども、そこは読者各自に委ねたい。

尾上さんのコラボの写真は、ほとんどが制服姿の少年少女たちである。それも都会風のファッショナブルなものではなく、レトロな学生服で、昭和のわたしには懐かしい。小学生も大学生も私服なのに、なぜ、中高生だけ制服を着るのだろうか。制服は「蛹」の外殻の役割を果たしているのかもしれない。定型の殻に包まれて、内奥の混沌が護られる。思春期が黙するときのごとく、制服は自己表現の衣装ではない。しかし、その制服の映像が一つひとつ何かを語っていて、そこにはまぎれもない思春期の姿がある。

---